

# 楽譜出版における献呈の役割

—16世紀後半のイングランドに視点をおいて—

能登原 由 美

(2001年9月28日受理)

Functions of the Dedication of the Printed Music Book :  
focusing on the music book published in late 16<sup>th</sup>-century England

Yumi Notohara

The purpose of this paper is to examine how music dedication functioned in the patronage, or the relationship between the dedicator and the dedicatee, in late 16<sup>th</sup>-century England. The dedicatory words usually stated that the music book would be dedicated to the dedicatee in return for some kinds of benefits offered to the dedicator. From this point of view, music dedication might be regarded as an obligation for the musician to provide music for the patron.

Through an investigation of the dedicated music books, however, the author asserts that the actual functions of music dedication were more complicated. The most important fact to note is that the dedication of published music books was not only intended for the dedicatee, but also for their "readers". This type of dedication, therefore, must be differentiated from the older form of patronage, where the musician provided works and performances only by request of the patron.

Key Words: Music dedication, Music patronage, Music printing and publishing,  
16<sup>th</sup>-century, England

キーワード：楽譜献呈、音楽パトロネージ、楽譜の印刷・出版、16世紀、イングランド

## はじめに

16世紀後半、楽譜の印刷・出版活動が本格化し始めたばかりのイングランドでは、大半の印刷楽譜は献呈文を伴っていた。すなわち、印刷楽譜は、献呈の対象物となっていたのである。このような楽譜の献呈は、楽譜の印刷・出版活動が始まる以前の手写本時代にも見られた。しかしながら、手写本時代の献呈と印刷楽譜の献呈とは、その性質が大きく異なるものであったと考えられる。なぜなら、手写本の場合、献呈用に作られた楽譜は、羊皮紙や子牛の皮の上に、細密画な

どの装飾に彩られた特製のものであるが、印刷楽譜の場合、献呈用の楽譜はサイズこそ大きい、装飾のほとんどない量産された楽譜と同じだからである。明らかに、前者では楽譜そのものが贈り物として大きな価値を持っていたのに対し、後者では楽譜そのものが価値を持っていたとは考えにくい。さらに、両者に見られる大きな相違は、献呈用写本が個人的に作られたものであるのに対し、印刷楽譜の場合は出版、すなわち売ることを念頭に作られた、いわば公的なものであるということである。

このように、手写本時代の楽譜献呈と印刷楽譜の献呈では、献呈の役割や機能は大きく異なっていたと考えられる。このことは、とりわけパトロネージの観点において重要である。有力者の保護と引き換えに行なわれる献呈はパトロネージの一形態とみなすことができるが<sup>1)</sup>、このように手写本と印刷楽譜において献呈物

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：原田宏司（主任指導教官）、吉富功修、増山賢治、水島裕雅、飯田操（社会科学研究科）

の価値が大きく異なり、その創作の前提も大きく異なるのであれば、パトロネージにおいて果たした役割もまた異なっていたものと考えられるからである。

従って、当時の印刷楽譜の献呈を追求することは、16世紀後半のイングランドにおける音楽創作活動の変化に関わる重要な研究であるといえる。しかしながら、当時の音楽パトロネージに関する研究において、これまで楽譜献呈の果たした役割が追求されたことはほとんどない。また、イングランドの楽譜の印刷・出版活動に関する研究においても、楽譜献呈の意味や機能が対象とされたことはこれまでにほとんどなかった。

以上のようなことから、本稿では、イングランドにおける楽譜の印刷・出版活動初期にみられる献呈について、その機能や意味を考察する。考察の手掛かりとして、大半の印刷楽譜に付けられた献呈文39例を分析し、献呈の意図、献呈者と被献呈者の関係や、献呈成立の過程を検証する。さらに、そこから明らかになった印刷楽譜における楽譜献呈の機能が従来のパトロネージにどのような相違をもたらし、その結果、音楽家の創作活動にどのような意味を持つことになったのかを明らかにする。

## 1. 献呈文

表1は、16世紀後半のイングランドにおいて出版された、全ての印刷楽譜とその献呈状況を表わしたものである。被献呈者の名前は、各楽譜の献呈文に掲げられたものである。ここからも明らかなように、大半の楽譜が献呈文を伴っている。特に、85年以降の楽譜では若干の例外を除いて全ての楽譜が献呈文を伴っている。若干の例外とは、ウィリアム・バード William Byrd (c 1540~1623) による3冊のミサ曲集 (c 1593~95) と、トマス・モーリー Thomas Morley (1557/8~1602) によるマドリガル集 (1594) であり、それぞれに献呈文を伴わない特別な事情があった。すなわち、バードのミサ曲集は、宗教的事項により、タイトル・ページとともに献呈文は取って付けられなかったと考えられる<sup>2)</sup>。一方、モーリーのマドリガル集は、献呈用楽譜には献呈文が付けられていたことが明らかだが現存するその他の楽譜にはなく<sup>3)</sup>、恐らく献呈後、何らかの理由により取り下げられたものとみられる。いずれにせよ、当時の出版楽譜では特別な事情のない限り、献呈文を伴うのが一般的であったことが明らかである。

献呈文は大半の印刷楽譜において、タイトル・ページの次に掲載されている。従って、タイトル・ページを開いて最初に目にするのがこれらの献呈文であり、楽譜集において重要な位置を占めるものであることがわかる。とりわけ、称号あるいは職名とともに献呈文

の冒頭に大きく印刷された被献呈者の名前は、楽譜を見るものにとって印象付けられるものであろう。

献呈文に続くのは、読者へ向けられた言葉や、あるいは他者によって書かれた、作曲者を称揚する詩などである。前者は12例、後者は7例においてみられる。これらのいずれも持たないものも27例あり、決して少なくない。このような楽譜の場合、献呈文に続くのは楽譜集の目次であり、その後、楽譜が始まる。従って、献呈文のみを伴う楽譜集では、献呈文は唯一、作曲者(編纂者)の考えや出版状況についての手掛かりを得る資料となる。

献呈文は、その内容によって大きく二つに分類することができる。すなわち、被献呈者に対する感謝の辞や被献呈者を称揚する文句といった、被献呈者に関する内容のみを伴うものと、被献呈者に関わるものだけではなく、出版の経緯や楽譜集の紹介、あるいは作曲家の音楽観など、献呈者自身に関わる内容をも伴うものである。被献呈者に関わる内容は全ての献呈文に含まれるが、さらにその中でも共通して見られるのは、被献呈者の音楽能力、あるいは音楽や芸術への理解を褒め称える言葉である。このように、献呈文において被献呈者の音楽に対する造詣の深さを述べることは、一種の慣習となっていたと見なすことができるだろう。

一方で、約半数の献呈文が、献呈者自身に関わる内容をも含んでいることは興味深い。これらの献呈文では、献呈者自身に関わる内容と被献呈者に関わる内容が同程度の割合を占めていることが多い。中には、トマス・イースト Thomas Est (Easte, Este) (?~1608) によって編纂、出版された *The Whole Booke of Psalmes* (1592) のように、献呈者自身に関する内容が全体の7割近くを占めるものもある。

このように、被献呈者自身に直接関わりのない内容が、献呈文において大きな割合を占めている事実は、献呈文の機能を改めて問い直す必要性を生じさせる。‘To the right honorable Sir Christopher Hatton...’ (Byrd 1588) といった常套句で始まる献呈文は、無論、被献呈者へ宛てられた一種の書簡とみなすことができる。しかしながら、実際の機能は、個々の献呈文によって大きく異なっていたのではないだろうか。そして、それは恐らく、個々の献呈の成立状況や、献呈者と被献呈者の関係如何によって生み出された相違と考えられるであろう。

## 2. 献呈者と被献呈者の関係

### 2-1. 献呈文から読み取る個々の関係

個々の献呈における献呈者と被献呈者の関係については、当時の記録がほとんど残されていないことから実

証するのは難しい。最も有力な手がかりは、献呈時に献呈者が有していた身分である(表1参照)。それによると、献呈者が自らの主人に対して献呈を行ったと判断できる献呈は、僅か2例(うち1例は、2人の作曲家による共同出版楽譜)しかないことがわかる。すなわち、当時の献呈は、必ずしも主従関係において行われていたのではなく、むしろ、主従関係以外の間で行われるのが一般的であった。残念ながら、資料によって明確に裏付けられる献呈者と被献呈者の関係はこれだけだが、個々の献呈文からある程度関係が読み取れる。興味深いのは、献呈者と被献呈者の関係が実に多様であったと推測できることである。

献呈文のみから全ての関係を明らかにすることは、無論不可能である。しかしながら、献呈文の中で被献呈者に関する言葉を詳細にみていくと、ある大きな違いがあることに気付く。すなわち、被献呈者から受けた保護に関して詳細な言及のあるものと、言及がないものである。例えば、数多くの楽譜を出版したモーリーの場合、このような被献呈者から受けた保護に関する記述のあるものとならないものが明瞭である。彼が1595年に出版した楽譜 *The first booke of canzonets to two voyces* では、被献呈者にかつて仕えていた自分の妻が被献呈者から受けた恩を感謝する旨を献呈文の中で述べている。一方で、同じ年に出版した楽譜 *The first booke of balletts to five voyces* の献呈文には、被献呈者の音楽的才を称賛する常套句はあるものの、被献呈者から何らかの保護や便宜を受けたことを表す文言は見当たらない。

このように、被献呈者から受けた庇護に関する言及がある例と無い例は、以前からパトロン関係にあったものとそうではないものの相違を示すといえるのではないだろうか。実際、上述のモーリーによる2冊の献呈例の場合、パトロンからの保護に関する記述のあった *The first booke of canzonets* は彼の妻の雇い主に対して行われた献呈であったことから、これが一種のパトロン関係の間で行なわれたものと見なせる。一方、記述のなかった *The first booke of balletts* では、モーリーが被献呈者とパトロン関係にあったという証拠はない。しかしながら、モーリーは出版直後、宮廷の実力者であったその被献呈者に対し、楽譜出版に関する独占的権利の獲得を求めて書簡を書いており、実際、1598年に彼は独占権を手に入れている。さらに、独占権の施行直前にも、権利をより有利なものにするための便宜を求めて同じ被献呈者に書簡を送っている(Chibbett 1976: 87.)。従って、この献呈の場合、出版以前はパトロン関係ではなかったが献呈の見返りに便宜を受けることから、出版によって成立したパトロン

ン関係といえるだろう。

当時の楽譜献呈は、出版によって成立するパトロン関係の間で行なわれることが比較的多かったようだ。すなわち、パトロン行為に関する言及が献呈文の中で見られない例は、全体の3割を越える15例にもなるのである。但し、当時の献呈が全て、庇護を前提としたパトロン関係においてのみ行なわれるものと考えてはならない。例えば、マイケル・カヴェンディッシュ Michael Cavendish (c 1565~1628) が親戚の女性に献呈した例のように、親戚や友人の間で行なわれる場合もある。また、ジョージ・カービー George Kirbye (?~1634) のように、パトロンの娘たちに献呈された例<sup>4)</sup>もある。これらの献呈文では、被献呈者から保護を受けていたことを示す記述はない。

以上のことから、次のような推測ができる。すなわち、献呈文において保護を受けていたことを示す記述のないものは、献呈によって何らかの保護を受けることを期待するものと、献呈者と被献呈者の関係がパトロン関係とは呼べないものがあったということである。従って、被献呈者から受けた保護に関する言及のある献呈文を含めると、献呈者と被献呈者の関係は、大きく三つのタイプに分類できる。献呈以前に何らかの保護を受けたという献呈以前からのパトロン関係、献呈の見返りとして保護を受けるという献呈によって成立するパトロン関係、そしてパトロン関係に含まれないものである。もちろん、美辞麗句を用いながら大仰に述べるのが常識となっていた当時の献呈文を、文字通りに受け止めることは危険である。とりわけ、献呈文の中で述べられる、被献呈者から受けた保護については、その程度差も大きいものと考えられる。中には、保護を期待する余り、被献呈者の些細な振る舞いを誇張した例もあるであろう。従って、ここでは全ての献呈例を三つのタイプのいずれかに分類するのではなく、当時の献呈が、必ずしも以前からパトロン関係にあった人々の間で行なわれるものではなかったことを指摘するのに留めたい。

## 2-2. 三つのパトロン関係

献呈文から、献呈者と被献呈者の関係には三つのタイプがあることが明らかになった。しかしながら、本論は献呈とパトロネージの問題を扱うものであるため、第三のタイプ、すなわちパトロン関係とはみなされないものについては、考察の対象外とする。従って、献呈文から抽出できるタイプは、以前からパトロン関係にあったものと、そうではないものの二つとなる。

ここで、イタリアにおけるルネッサンス期の文化を考察したパークによる分類を参照したい。彼は、芸術

表1 1550年から1600年に至るまでの印刷楽譜と献呈状況<sup>1)2)</sup>

出版年	作曲者(編集者)	楽譜集のタイトル	被献呈者(称号)
1553	Christopher Tye	The Actes of the apostles	Edward VI
1571	Thomas Whythorne	Songs of three, fower and fyve voyces	なし
1575	William Byrd and Thomas Tallis	Cantiones quae ab argumento sacrae vocantur	Elizabeth I
1579	William Damon	The psalmes of David in English meter	なし
1585	John Cosyn	Musicke of six, and five partes	Francis Walshingham
1588	William Byrd	Psalmes, sonets, and songs	Christopher Hatton
1588	(Nicholas Yonge)	Musica Transalpina	Gilbert Talbot (7th Earl of Shrewsbury)
1589	William Byrd	Songs of sundrie natures	Henry Carey, (Baron of Hunsdon)
1589	William Byrd	Liber primus sacrarum cantionum	Edward Somerset (4th Earl of Woceter)
1590	(Thomas Watson)	The first sett, of Italian madrigalls	Robert Devereux (2nd Earl of Essex)
1590	Thomas Whythorne	Duos, or songs for two voyces	Francis Hastings (Earl of Huntingdon)
1591	(William Swayne)	The former booke of the musicke of M. William Damon	William Cecil (Baron of Burghley)
1591	William Byrd	Liber secundus sacrarum cantionum	Lord Lumley
1591	John Farmer	Divers and sundrie waies of two parts in one	Edward de Vere (Earl of Oxford)
1592	(Thomas Est)	The whole of psalmes	John Puckering
c.1593.	William Byrd	Mass for 4 voyces	なし
1593	Thomas Morley	Conzonets, or little short songs to three voyces	Mary Sidney (Countess of Pembroke)
c.1594.	William Byrd	Mass for 5 voyces	なし
1594	Thomas Morley	Madrigalls to foure voyces	John Puckering, しかし後に取り下げ
1594	John Mundy	Songs and psalmes composed into 3. 4. and 5. Parts	Robert Devereux (2nd Earl of Essex)
c.1595.	William Byrd	Mass for 3 voyces	なし
1595	Thomas Morley	The firste booke of canzonets to two voyces	Lady Periam
1595	Thomas Morley	The firste booke of balletts to five voyces	Robert Cecil (Earl of Salisbury)
1597	John Dowland	The first booke of songes or ayers of foure partes	George Carey
1597	Anthony Holborne	The ciththarn schoole	Thomas, Lord Burgh (Baron of Gainsburghe)
1597	George Kirbye	The first set of English madrigalls	Anne and Francis Jermin
1597	Thomas Morley	Canzonetts or little short aers to five and six voyces	George Carey
1597	(Thomas Morley)	Canzonetts or little short song to four voyces	Henry Tapsfield
1597	Thomas Weelkes	Madrigals to 3. 4. 5. and 6. Voyces	George Phiplot
1597	(Nicholas Yonge)	Musica transalpina, The second booke of madrigalles	Henry Lennard
1598	Michael Cavendish	14. ayers in tabletorie to the lute . . . and 8. Madrigalles to 5. voyces	Lady Arabella Stuart
1598	Giles Farnaby	Canzonets to fowre voyces, with a song of eight parts	Ferdinando Heybourne
1598	(Thomas Morley)	Madrigals to five voyces	Gervis Clifton
1598	Thomas Weelkes	Balletts and madrigals to five voyces, with one 6	Edward Darcy
1598	John Wilbye	The first set of English madrigals	Charles Cavendish
1599	Richard Alison	The psalmes of David in meter	Anne (Countess of Warwick)
1599	John Bennet	Madrigalls to fowre voyces	Ralph Assheton
1599	John Farmer	The first set of english madrigals	Edward de Vere (Earl of Oxford)
1599	Anthony Holborne	Pavans, galliards, almaines and other short aeirs	Richard Champerowne
1599	Thomas Morley	The first booke of consort lessons	Stephen Some
1600	John Dowland	The seconde booke of songes or ayres	Lucy Harington (Countess of Bedford)
1600	Robert Jones	The first booke of songes and ayres of foure parts	Robert Sidney (1st Earl of Leicester)
1600	Thomas Morley	The first booke of Ayres	Ralph Bosvile
1600	Thomas Weelkes	Madrigals of 5. and 6. parts	Henry Lord Windsor of Stanwell (Baron of Bradenham), 前半部を献呈 George Brooke, 後半部を献呈

注1) 楽譜については、Pricelによる「音楽出版物一覧表1563-1632」(1981, 209-215)、及び、

*Repertoire international des sources musicales. Ser. A, B* を基に能登原が作成。

注2) イングランドで出版された印刷楽譜を対象としており、輸入楽譜は含まれていない。

楽譜出版における献呈の役割

出版時の献呈者の身分 <sup>3)</sup>	献呈者と被献呈者が主従関係 <sup>4)</sup>	献呈文におけるパトロネージに関する言及の有無
エリー大聖堂音楽家(?), また王室礼拝堂音楽家(?)	○	あり
特になし		—
王室礼拝堂音楽家	○	なし
王室礼拝堂音楽家	○	—
王室礼拝堂音楽家		—
特になし		あり
王室礼拝堂音楽家		なし
特になし		なし
王室礼拝堂音楽家		あり
王室礼拝堂音楽家		あり
特になし		なし
特になし		あり
特になし		あり
王室礼拝堂音楽家		あり
特になし		あり
楽譜印刷家		なし
王室礼拝堂音楽家		—
王室礼拝堂音楽家		あり
王室礼拝堂音楽家		—
王室礼拝堂音楽家		—
セント・ジョージ礼拝堂(ウインザー)オルガニスト		なし
王室礼拝堂音楽家		—
王室礼拝堂音楽家		あり
王室礼拝堂音楽家		なし
特になし		あり
女王の音楽助教師(?)		あり
Jermyn家の専属音楽家	(被献呈者の父親と主従関係)	なし
王室礼拝堂音楽家		あり
王室礼拝堂音楽家		あり
特になし		あり
セント・ポール大聖堂歌手		なし
特になし		なし
特になし		あり
王室礼拝堂音楽家		なし
特になし		あり
Kytsons家専属音楽家		なし
特になし		あり
特になし		あり
特になし		あり
女王の音楽助教師(?)		あり
王室礼拝堂音楽家		あり
デンマーク宮廷音楽家		なし
特になし		なし
王室礼拝堂音楽家		あり
ウィンチェスター・カレッジ・オルガニスト		なし
		あり

注3) 献呈者の身分については *New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 2d ed. の各作曲家の項目を参照した。

なお、定まった身分の記録がないものはすべて「特になし」とした。

注4) 現段階で献呈者と被献呈者が主従関係にあると判断できるもの。

家とパトロンとの関係について以下のように分類している。まず、住み込み型。これは、貴族などが芸術家や文筆家を長期にわたって衣食住を提供しながら雇い、その間、自らの望む作品を創作させるというもの。続いて、注文型。住み込み型同様、パトロンと芸術家の個人的な関係であるが、注文した作品が仕上がるまでの一時的なもの。そして、市場型。これは芸術家が「すでに出来あがった曲 ready-made」を、直接売るか、あるいは仲買人を通して売るというもの(Burke 1986: 89.)<sup>5)</sup>。このような分類は、当時のイングランドにおけるパトロネージにもあてはまるものと考えられることができるであろう。これを楽譜献呈にあてはめると、最初の二者は、献呈以前にパトロン関係にあったもの、最後のものは、献呈と共に成立する関係とみなすことができ、これは、先に献呈文から抽出した二つのタイプに相当するといえる。しかしながら、献呈以前にパトロン関係にあったもののうち、全てがバークの述べるような、一定期間、保護を受けながらパトロンの注文に応じて行なわれた献呈であった可能性は薄い。なぜならば、これらの献呈の中で、献呈者が被献呈者から長期にわたって保護を受けていた記録のあるものはほとんどないからである。さらに、バードやモーリーのように、1年に複数の楽譜献呈を行なっている例もある。これらの献呈において、一定期間パトロンの下に身を寄せ注文に応じた創作活動を行なった例が頻繁にあったと考えるのは難しい。

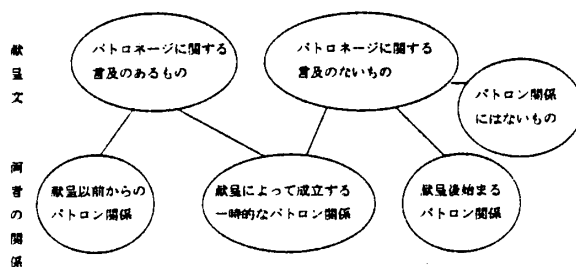
恐らく、被献呈者から受けた保護を記述した献呈者の三分の一は、被献呈者からの注文に応じて創作を行なったのではなく、バークのいう市場型、すでに出来あがった曲を携えて被献呈者を探す例だったと考えられる。それは、献呈文に見られる表現が示している。すなわち、幾つかの献呈文では、献呈の受け入れを願う表現が見られるのである。例えば、トマス・ウィールクス Thomas Weelkes (1576~1623)が1598年に出版した *Balletts and madrigals to fiue voyces* の献呈文では、以下のように述べられる。「私の音楽演奏を受け入れた紳士が、その僕による労力を拒否することは決してないと考えます<sup>6)</sup>」。このように、以前、被献呈者とパトロン関係にあったとみられる献呈でも幾つかの例では、献呈作品そのものはパトロンの注文によって創作されたのではなく、創作の後、献呈が行なわれたと見られる。

一方、16世紀半ばのヴェネツィアの楽譜出版に関する研究を行なったバーンスタインも、バークを引用しながら献呈者と被献呈者の関係を分類している。但し、彼女の場合、パトロンが作品を注文するか否かという視点からの分類ではない。彼女の分類は、献呈を通じ

てパトロン関係がいつ成立するかという視点からの分類である。すなわち、献呈が行なわれる時点ですでに成立していたパトロン関係、献呈後に成立するパトロン関係、そして、作曲家が出版費用を負担してもらうために、「出来あがった曲 ready-made」を抱えてパトロンを探し成立する関係である(Bernstein 1998: 148-149.)。最後のカテゴリーは、バークの分類で市場型に相当するもので、出版時にのみ成立する一時的なパトロン関係と言い換えることができよう。ここでの分類も同様に、献呈以前にパトロン関係にあったものと、そうではないものの二つに分類できる。

以上の分類から、16世紀後半のイングランドにおける楽譜献呈は、以下に述べる三つのパトロン関係の下で行なわれたと考えることができる。すなわち、献呈以前から始まっていたパトロン関係、献呈によって成立する一時的なパトロン関係、献呈以後始まる長期のパトロン関係である。ここに、先に示した、献呈文に見られる保護の有無による二つのタイプをあてはめると、以下のように表わされる。

図1 献呈文の内容にみられる献呈者と被献呈者の関係



### 3. 献呈の意図

#### 3-1. 金銭の授与、地位の斡旋など

三つのパトロン関係において成立する献呈は、それぞれいかなる意図を持って行なわれたものだったのだろうか。

献呈以前から始まっていたパトロン関係は、献呈の意図を推測するのは容易であろう。この関係では、パトロンからの注文によって行なわれる献呈も含まれると考えられるが、それを示す証拠は今のところない。また、他の関係ではみられない献呈の意図として挙げられるのが、パトロンの庇護に対する感謝のしるしである。その例として、バードが1591年に献呈した *Liber secundus sacrarum cantionum* の献呈文がある。この献呈文は、バードによる他の献呈文と比較しても被献呈者に対する思いが強く表われており、献呈文の全てがパトロンに関わる内容となっている。すなわち、被献呈者の音楽的才の描写、これまで自らに与えられた庇護、そしてそれに対する感謝の念としてこの楽譜集

が誕生したことなどである。実際、この楽譜集の被献呈者は、バードとカトリック信仰を通じて交流のあったカトリック貴族であった。また、トマス・タリス Thomas Tallis (c 1505~1585) とバードが、全ての楽譜印刷出版に関する独占権を与えられた返礼としてエリザベス女王に献呈した1575年出版の *Cantiones quae ab argumento sacrae vocantur* も、これに当てはまる例であろう。

一方、献呈によって一時的に成立するパトロン関係や献呈以後始まるパトロン関係では、献呈の意図は大きく異なる。すなわち、庇護を受けることを目的として献呈が行なわれるのである。一時的に成立するパトロン関係において、献呈者が望む庇護の多くは出版費用の援助であったと考えられる。例えば、1600年に出版されたジョン・ダウランド John Dowland (1563~1626) の *The seconde booke of songes or ayres* は、ダウランド夫人が手稿譜と献呈から得られる半額分の権利を20ポンドで出版人に譲渡し、出版されたものであった<sup>7)</sup>。ここには、まだ獲得していない被献呈者から得られる報酬が、すでに契約の中に含まれている。但し、金銭のために作品を出版することがスティグマ(恥、不名誉)とされた当時の出版事情では、そのような援助を求める直接的な内容は献呈文にはみられない。

また、金銭的援助だけではなく、職や地位の斡旋、社会的な身分保証といったものも、献呈によって求められるものであった。これは、一時的に成立するパトロン関係のみならず、全ての関係にあてはまるものといえるだろう。モーリーによる数多くの楽譜献呈は、献呈の目的が様々であったことを明らかにする。例えば、楽譜の印刷・出版に関する独占権の獲得を狙って、宮廷の実力者に楽譜集を献呈した例についてはすでに述べた通りである。また、法律家に献呈された1600年の *The first booke of Ayres* の場合、当時、モーリー自身が巻き込まれていた、独占権をめぐる裁判の便宜を得るために献呈されたものと考えられる (Chibbett 1976: 90-91.)。

### 3-2. スティグマの回避、ステータスの付与

上述のように、献呈の意図には、日頃の庇護に対する感謝のほか金銭や地位の確保など、何らかの利益を得ることが含まれていた。しかしながら、この利益には、被献呈者自身が与える便宜によって得られるものばかりではなく、被献呈者の名前を通して間接的に得られる利益も含まれていた。この事実が最もよく表われているのが、スティグマに対する弁明を伴った献呈文である。

スティグマは、当時のイングランドにおいて出版さ

れる様々な文芸作品に対して向けられた侮蔑の念である。宮廷や貴族社会の中で行なわれる文芸活動は、あくまでも余暇のためのものであって金銭のために行なわれるべきではないとの考えがこのような風潮を生み出すこととなった<sup>8)</sup>。しかしながら、そればかりではなく、本来、宮廷を中心とする文化サークルにおいてのみ享受されていたはずの文芸作品が、出版によってより多くの身分の人々に共有されることを敬遠する、当時の根強い階層意識がこの風潮の浸透を一層促したと考えられる (有路 1997: 115.)。宮廷人や上流貴族の余暇の音楽として出版され始めた当時の楽譜集も、このような風潮と決して無縁だったとは言えない<sup>9)</sup>。それは、スティグマから身を守るために常套手段となった出版に対する弁明が、楽譜集の献呈文にも見られることに明らかである。例えば、バードが1588年に出版した *Psalmes, sonets, and songs* の献呈文では、当時の出版物でよくみられる出版の弁明が述べられている。すなわち、「あなた様をはじめとする多くの友人からの度重なる薦めと、私の歌が多くの誤りに満ちた写譜によって四方へ広まっていることへの考慮、この2つの事情があつてようやく、音楽における私の僅かながらの技と労力の実りを印刷するという事に同意したのです<sup>10)</sup>」というものである。

献呈は、スティグマという出版に対する否定的風潮から身を守る手段としても大きな役割を果たしたようだ。すなわち、高名な人物への献呈の裏には、被献呈者の名前が持つ影響力によって、出版作品の価値、あるいは出版を行なった作曲者にスティグマのレッテルが貼られることを防ぐ狙いがあったものと思われる。例えば、自らが貴族の家系出身であるカヴェンディッシュによる楽譜献呈にこのような思惑が指摘できる。彼は、親戚である貴族に宛てた献呈文の冒頭でまず、「アラベツラ嬢の名誉ある庇護に(傍点筆者)<sup>11)</sup>」と、他の献呈文では見られない「庇護 protection」という言葉呼びかけの中で用いている。貴族の出自である自らの境遇が出版行為には適さず、そのためにカヴェンディッシュにとって親戚の女性の擁護が必要であったことは、続く献呈文の中からも読み取れる「たとえどんなに時代の政治形態が、高貴な身分の人々にとって、非難を避けても誇りを表わしても卑しめられ再び高めることが困難な状況であろうとも、あなただけではその誉れ高き性質でもって目の前にいる僕に支援を送ってくださるという希望が持てるのを私は知っているのです<sup>12)</sup>」。貴族の作曲家カヴェンディッシュの献呈には、作品の出版によってスティグマの汚名を着せられかねない自らの立場の擁護を求めることが、大きな目的の一つであったことは間違いない。

このように、作曲者のステイタスを守ることも献呈を行なう理由であったと考えられる。このことはカヴェンディッシュのような身分の高い人々ばかりではなく、職業音楽家の場合にも当てはまることであった。この場合、被献呈者の名前はスティグマを回避するだけでなく、作品や作曲者のステイタスをより高めることにもなったであろう。ある貴族に住み込み音楽家として雇われていたジョン・ウィルビー John Wilbye [willoughbye] (1574~1638) は、1598年に出版した *The first set of English madrigals* の献呈文で以下のように述べている、「あなた様の支持は毒舌や冷たい非難に太刀打ちできる権能を持つものとなります<sup>13)</sup>」。彼が献呈したのは彼の主人ではなく、音楽愛好家として有名であった貴族<sup>14)</sup>に対してであった。さらに、献呈文には、彼が以前からこのパトロン保護を受けていたことを窺わせる部分は見られない。従って、ウィルビーが被献呈者の名前の持つ影響力を意識して献呈を行なったことは十分に考えられるのである。

#### 4. 印刷楽譜における献呈の機能

上述のように、献呈の目的には金銭や地位の斡旋ばかりではなく、被献呈者の名前から得られるステイタスも重要であったことがわかる。このように考えると、有力者とのパトロン関係を人々に示すことのできる献呈文の意味もより大きな意味を持つことになる。すなわち、献呈文は単なる被献呈者への書簡という機能を越えた重要性を有していたのである。

献呈文において、出版の経緯、楽譜集の説明、また作曲者自身の音楽観といった、献呈者自身に関わる内容が大きな割合を占めている事実はすでに述べた通りである。このような内容は、単に被献呈者へのメッセージとしてだけでは受け取れないであろう。特に、出版に対する弁明は、被献呈者に向けられたものであると同時に、作曲者がスティグマの汚名を防ぐために楽譜を見る人々全体に向けられたものであると考えられる。また、全体の7割近くが被献呈者と関わりのない内容で占められ、被献呈者に対する言葉は献呈文の最後の数行においてのみ語られているイーストの例もある。彼は、「この(文章の)締めくくりとして<sup>15)</sup>」という書き出しで、音楽の理解者として被献呈者を賛美すると共にパトロネージを請う常套句のみを書いているのである。このような献呈文が被献呈者にのみ宛てられた文章であるとは考えにくい。つまり、これらの献呈文は、被献呈者だけではなく、楽譜の「読み手」にも向けられたものといえるのである。

ステイタスを目的とした被献呈者の選別も同様に、作曲者の「読み手」に対する意識の表れといえるだろう。

このように、献呈文が作品や作者のステイタスを誇示する場となった事実は、ウィルビーの例に見られるように、被献呈者の名前が持つ影響力の大きさをすでに作曲家が認識していたことから明らかである。そればかりではなく、スティグマという風潮の下で生まれた様々な文句が慣習化していく過程にも表われている。すなわち、出版の弁明を始めとするスティグマを回避するための文言は、汚名を逃れるための手段として宮廷人に使われた一方で、このような弁明を行なうことに上流人としてのステイタスを見出ししていたより低い身分の人々によって「模倣され」、常套句となっていくとみられるのである (Saunders 1951: 150-151)。

一方で、パトロネージの観点からみると、印刷楽譜の献呈に見られる音楽家とパトロンとの関係は特徴的であったといえることができる。つまり、献呈は元々パトロン関係にあった人々の間でのみ行なわれるのではなく、献呈を通じて結ばれるパトロン関係や、あるいは献呈を介してのみ一時的に成立するパトロン関係で行なわれる場合が多かった。この場合、楽譜は、パトロンからの注文、あるいはパトロンから受ける保護への返礼として行なわれた音楽演奏や作品の役割とは大きく異なり、有力者と新たにパトロン関係を結ぶための手段として機能していたと考えることができる。さらに重要なのは、楽譜献呈におけるパトロネージの成立には、パトロン側からの働きかけよりも作曲者側からの働きかけが強かったと見られることである。それは、先にも述べたように、献呈の受け入れを願う献呈文からも窺えるが、また、献呈が適切に成立しなかったと見られる献呈例の存在からも明らかである。例えば、モーリーが献呈文を取り下げた例<sup>16)</sup>や、また、夫人によって出版人と契約が取り交わされ出版されたダウランドの楽譜集の例も同様に、献呈が成立しなかった具体例である<sup>17)</sup>。このような作曲者主導のパトロネージの成立は、パトロンからの注文、あるいはパトロンの意向に沿って創作、演奏が行なわれて成立していたパトロネージとは大きく異なるといえるだろう。

但し、ここで留意しなければならないのは、当時の楽譜献呈には、様々なパトロン関係と献呈の目的が存在していたということである。たとえ一人の作曲家が行なう楽譜献呈であってもその機能は献呈ごとに異なっていた。モーリーが数多く行なった楽譜献呈がその良い例である。以前のパトロンに対する感謝のしるしとして行なわれた献呈もあれば、特定の便宜をねらって行なわれた例もある。また、パードのように、献呈する楽譜集の性格に応じて被献呈者を選別していた作曲家もいる。彼は、ラテン語による宗教音楽集2冊(1589、



1591年)は同じカトリック信者として保護を授かっていた人々に、一方、英語による世俗歌曲集2冊(1588、1589年)は特にカトリックともバード自身とも強いつながりのみられない宮廷役人に、それぞれ献呈を行なっている。これらの献呈文の内容は大きく異なり、前者から読み取れるのはバードとパトロンとの緊密な関係と、このようなパトロンに対するバードの忠誠心といった愛情、一方、後者に書かれているのは、出版に対する弁明やパトロンの音楽愛好心を称揚する常套句のみで、バードがパトロンと親しい関係にあったことを窺わせる部分は見られない。すなわち、バードやモーリーの楽譜献呈から明らかのように、当時の楽譜献呈には、様々なパトロネージの形態が混在していたのである。

このように、イングランドで最初の楽譜の印刷・出版活動最盛期である16世紀最後の十年余りの間に行なわれた楽譜献呈は、音楽家と雇い主あるいは注文主といった、狭い意味でのパトロン関係において行なわれるものから、献呈においてのみ成立する一時的なパトロン関係において交わされるものまで、多様な形態が存在していた。しかしながら、楽譜献呈の成立に作曲者が主導的な立場をとっている例が見られる事実は、それまでの音楽パトロネージのあり方が明らかに変化しつつあったこと、さらにパトロネージによって支えられていた音楽家の創作活動のあり方も徐々に変化しつつあったことを指し示すといえるのである。

### 今後の課題

本論では、16世紀後半のイングランドにおける楽譜献呈に注目し、そこにみられる音楽パトロネージの変化を読み取った。この時期のイングランドの楽譜献呈を詳細に分析、記述した研究がこれまでになかったことから、本論では当時の楽譜献呈の実態を、先行研究の成果や献呈文そのものからまず明らかにすることに焦点を絞った。従って、次に16世紀後半のイングランドにおける楽譜献呈を時代的、地域的な視点から特徴づける必要があるだろう。また、音楽パトロネージの視点においてより深く洞察するためには、各作曲家の創作活動において楽譜献呈が担っていた役割を追求する必要があると思われる。

### 注

1) 本論で述べるパトロネージやそれに関わる用語について、ここで定義しておきたい。本論で述べるパトロネージとは、特定の人物や組織(パトロン)が文芸家や作品に保護を与える行為すべてを含む。このようなパトロンと文芸家の関係をパトロン関係と呼ぶ。中でも、文芸家が定期的な賃金の受給と引き

換えにパトロン(この場合は主人)に奉仕する関係の場合、これを主従関係と呼ぶ。

- 2) 熱心なカトリック教徒であったバードは、当時、ロンドンから離れたカトリック教徒の所領で生活していた。これらのミサ曲は、ここで内密に行なわれていたカトリック典礼のために作曲されたものというのが通説となっている。タイトル・ページや献呈文がないのは、カトリック教徒に対する弾圧によりこのような典礼音楽の出版が大きな危険を伴ったことから判断されたものと考えるのが一般的な見方となっている。
- 3) 残されたこの楽譜集のうち、他のものよりサイズが大きく恐らく献呈用と考えられる楽譜のタイトル・ページの裏に、元々そこにあったとみられる献呈文の裏移りした文字の痕跡が Dart によって確認された(Dart 1963: 401-405.)。
- 4) この楽譜の献呈文において、被献呈者であるアン・ジャーミンとフランシス・ジャーミン Anne & Francis Jermin (生没年不明)は、ロバート・ジャーミン Robert Jermin (生没年不明)の娘と記されている。カービーは、ジャーミンが所有していた Rushbrooke Hall で雇われていた (*New Grove Dictionary of Music and Musicians*, 2d ed., s. v. "Kirbye, George.")。
- 5) バークは、このほか、さらに二つの関係を提示する。しかしながら、彼が述べるように、当時はまだ現れていないシステムのため、ここでは省略した。
- 6) 'I presume that gentleness which accepts my service, will never reject the labours of his servant.' (Weelkes 1598) なお、英語の表記については、原文をそのまま引用している。但し、's'の表記については、現代の文字に直している。以下同じ。
- 7) このことは、Dowling (1932) において、明らかにされた。
- 8) スティグマに関する研究は、以下の研究を参照。Saunders (1951); Bennett (1965: 1-29.)
- 9) イングランドの楽譜出版活動に、スティグマの風潮が大きな影響を与えたとする見方もある (Price 1981: 179.)。
- 10) 'The often desires of many my good friends, Right honorable, and the consideration of many vntrue incorrected coppies of divers my songes spred abroade, have beene the two causes, chiefly mouing my small skill and labors in Musicke.' (Byrd 1588)
- 11) 'To the honorable *protection* of the Ladie Arabella' (Cavendish 1598)

- 12) '... howsoever the policie of times may hold it vnfit to raise men humbled with aduersities to titles of dearnesse, whether to shunne charge, or expresse pride, I rather know not, yet you I hope out of the honour of your nature, will vouchsafe your fauours to a forward seruant... ' (Cavendish 1598)
- 13) '... that your Countenance is a sufficient warrant for them against sharp tongues and unfriendly censures;... ' (Wilbye 1598)
- 14) 被献呈者のチャールズ・カヴェンディッシュ Charles Cavendish (1553~1617) は、楽譜の収集を積極的に行ないその蔵書の多さで名高いカヴェンディッシュ一族の中で、初代デヴォンシャー伯 ウィリアム・カヴェンディッシュ William Cavendish (1551~1626) の弟にあたる。作曲家マイケル・カヴェンディッシュは、この兄弟のいとこの末息子である。また、マイケルが楽譜を献呈したアラベッラ・ステュアート Arabella Stuart (?~1615) は、チャールズの姪にあたる。
- 15) 'Now hauing finished it, ... ' (Est 1592)
- 16) 第1節参照。取り下げた理由として様々なことが指摘されているが、いずれにしても、被献呈者から献呈が拒否されたというのが通説となっている。
- 17) その理由として、被献呈者が出版当時、ロンドンから離れたこと、また楽譜集の内容に被献呈者が不満を持ったことが挙げられている (Price 1981: 185.)。

### 引用文献

- 有路雍子、成沢和子、舟木茂子 1997『宮廷の文人たち』東京：リーベル出版。
- Bennett, H. S. 1965 *English Books & Readers 1558 to 1603*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bernstein, Jane A. 1998 *Music Printing in Renaissance Venice*. Oxford: Oxford University Press.
- Brown, David. 1957 "William Byrd's 1588 Volume," *Music & Letters*. 38: 371-377.
- \_\_\_\_\_. 1969 *Thomas Weelkes, a Biographical and Critical Study*. London: Faber and Faber.
- \_\_\_\_\_. 1974 *Wilbye*. London: Oxford University Press.
- Burk, Peter. 1999 *The Italian Renaissance*. 2d ed. Princeton: Princeton University Press.
- Chibbett, Michael. 1976 "Dedication in Morley's Printed Music," *Research Chronicle*. 13: 84-94.
- Dart, Thurston. 1963 "A Suppressed Dedication for Morley's Four-part Madrigals of 1594," *Transactions of the Cambridge Bibliographical Society*. 3: 401-405.
- Dowling, Margaret. 1932 "The Printing of John Dowland's *Second Booke of Songs or Aryes*," *The Library, forth series*. 12 / 4: 365-380.
- Fellowes, Edmund H. 1948 *William Byrd*.
- Harley, John. 1997 *William Byrd: Gentleman of the Chapel Royal*. London: Scolar Press.
- Kerman, Joseph. 1962 *The Elizabethan Madrigal: A Comparative Study*. New York: American Musicological Society.
- Krummel, Donald W. 1975 *English Music Printing 1553-1700*. London: Bibliographical Society.
- Murphy, Catherine Amt. 1963 *Thomas Morley Editions of Italian Canzonets and Madrigals, 1597 and 1598*. Michigan: Ann Arbor.
- Owen, A. E. B. 1961 "Giles and Richard Farnaby in Lincolnshire," *Music & Letters*. 42: 151-154.
- Philipps, G. A. 1976 "Patronage in the Career of Thomas Weelkes," *The Musical Quarterly*. 62: 46-57.
- \_\_\_\_\_. 1977 "John Wilbye's Other Patrons: The Cavendishes and their Place in English Musical Life during the Renaissance," *The Music Review*. 38: 81-93.
- Poulton Diana. 1982 *John Dowland*. London: Faber and Faber Limited.
- Price, David C. 1981 *Patrons and Musicians of the English Renaissance*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ruff, Lillian M. and Wilson, D. Arnold. 1969 "The Madrigal, the Lute Song and Elizabethan Politics," *Past & Present*. 44: 3-51.
- Saunders, J. W. 1951 "The Stigma of Print," *Essay in Criticism*. 1: 139-164.
- Woodfil, Walter L. 1953 *Musicians in English Society: from Elizabeth to Charles I*. Princeton University Press.